

寺田寅彦

竜舌蘭





竜り  
ゆ  
う

舌ぜ  
つ

蘭ら  
ん



一日じめじめと、人の心を腐らせた霧雨もやんだよう  
で、静かな宵闇よいやみの重く湿った空に、どこかの汽笛が長い  
波線を引く。さっきまで「青葉茂れる桜井さくらいの」と繰り  
返していた隣のオルガンがやむと、まもなく門の鈴が鳴  
って軒の葉桜のしずくが風のないのにばらばらと落ち  
る。「初雷様だ、あすはお天気だよ」と勝手のほうでは  
あさんがひとり言を言う。地の底空の果てから聞こえて  
来るような重々しい響きが腹にこたえて、昼間読んだ悲  
惨な小説や、隣の「青葉しげれる桜井の」やらが、今さ

らに胸をかき乱す。こんな時にはいつもするように、机の上にはひじを突いて、頭をおさえて、何もない壁を見つめて、あった昔、ない先の夢幻の影を追う。なんだか思いう出そうとしても、思い出せぬ事があってうっとりしている、雷の音が今度はやや近く聞こえて、ふっと思いつくと共に、ありあり目の前に浮かんだのは、雨にぬれた竜舌蘭の鉢である。

河野の義さんが生まれた年だから、もうかれこれ十四五年の昔になる。自分もまだやっと十か十三ぐらいであったろう。きたる幾日義雄の初節句の祝いをしますから

皆さんおいでくださるようにとチョン鬻まげの兼作爺かねさくじいが案内  
に来て、その時にもらった紅白の餅もちが大きかった事も覚  
えている。いよいよその日となって、母上と自分と二人  
で、車で出かけた。おりからの雨で車の中は窮屈であつ  
た。自分の住まっている町から一里半余、石ころの田舎道いなかみち  
をゆられながらやっとねえさんの宅うちへ着いた。門の小流  
れの菖蒲しやうぶも雨にしおれている。もうおおぜい客が来て  
いて母上は一人一人にねんごろに一別以来の辞儀をせら  
れる。自分はその後ろに小さくなつて手持ちぶさたでい  
ると、おりよくここの俊ちゃんが出て来て、待ちかねて

いたというふうで自分を引っ張ってお池の鯉こいを見に行つた。ねえさん所には池があつていいと子供心にうらやましく思っていた。池はちよつとした中庭にいつぱいになつていて、門の小川の水が表から床下をくぐつてこの池へ通い裏田んぼへぬけるようにしてある。大きな鯉、緋鯉ひこいがたくさん飼つてあつて、このごろの五月雨さみだれに増した濁り水に、おとなしく泳いでいると思うとおりおりすさまじい音を立ててはね上がる。池のまわりは岩組みになつて、やせた卷柏かんがしわ、桜欄竹しゅろちくなどが少しあるばかり、そしてすみの平たい岩の上に大きな竜舌蘭りゅうぜつらんの鉢が乗つてい



る。ねえさんがこの家へ輿入れこしいになった時、始めてこの鉢はちを見て珍しい草だと思つたが、今でも故郷の姉を思うたびにはきつとこの池の竜舌蘭を思い出す。今思い出したのはこの鉢であつた。

池を隔てて池いけの間まと名のついたこの小座敷の向かい側は、台所に続く物置きいたじとみの板葺いたじとみの、その上がちよつとしやれた中二階ちゅうにがいになっている。

あこのころの田舎いなかの初節句はつせつぐの祝宴はたいてい二日続いたもので、親類縁者しんれいゑんしやはもちろん、平素はあまり往来せぬ遠縁ゑんゑんのいとこ、はとこまで、中にはずいぶん遠くからはる

ばる泊まりがけで出て来る。それから近村の小作人、出入りの職人まで寄り集まって盛んな祝いであつた。近親の婦人が総出で杯盤の世話をし、酌しやくをする。その上、町から芸者を迎えて興を添えさせるのが例なので、この時も二人来ていた。これも祝いのあるうちは泊まっていたので、池の向こうの中二階はこの芸者の化粧部屋けしようにべやにも休憩所にもまた寢室にもなっていた。

夕方近くから夜中過ぎるまで、家じゆうただ目のまわるほど忙しく騒がしい。台所では皿鉢さらしぼちのふれ合う音、庖ぼう丁ちようの音、料理人や下女らの無作法な話し声などで一通

り騒がしい上に、ねこ、犬、それから雨に降り込められて土間へ集まっている鶏までがいつそうのにぎやかさを添える。奥の間、表座敷、玄間とも言わず、いっぱいの人で、それが一人一人にお辞儀をしてはむつかしい挨拶あいさつを交換している。

その混雑の間をくぐり、お辞儀の頭の上を踏み越さぬばかりに杯盤酒肴しゅこうを座敷へはこぶ往来も見ることから忙しい。子供らは仲間がおおぜいできたうれしさで威勢よく駆け回る。いったい自分はそこから陰気な性たちで、こんな騒ぎがおもしろくないから、いつものように宵よいのう

ちいいかげんごちそうを食ってしまおうと奥の蔵の間へ行  
 って戸棚とだなから八犬伝はつけんでん、三国志さんごくしなどを引っぱり出し、おな  
 じみの信乃しのや道節どうせつ、孔明こうめいや関羽かんうに親しむ。この室へやは女の  
 衣装いしょうを着替える所になっていたので、四面にずらりと衣  
 桁こうを並べ、衣紋竹えもんだけを掛けつらねて、派手なやら、地味な  
 やらいろんな着物が、虫干しの時のように並んでいる。  
 白粉おしろい臭い、汗くさい変な香がこもった中で、自分は信乃しの  
 が浜路はまじの幽霊と語るくだりを読んだ。夜のふけるにつれ  
 て、座敷のほうはだんだんにぎやかになる。調子を合わ  
 す三味線の音がすると、清らかな女の声でうたうのが手

に取るように聞こえる。調子はずれの鄙歌ひなうたが一度に起こって皿さらをたたく音もする。ひとしきり歌がやんだと思うと、不意に鞭声べんせい粛々しゆくしゆくとたれやらがいやな声でわめく。

信乃が腕をこまねいてうつむいている前に片手を畳につき、片袖かたそでをくわえている浜路の後ろに、影のように現われた幽霊の絵を見ていた時、自分の後ろの唐紙からかみがすするとあいて、はいつて来た人がある。見ると年増としまのほうの芸者であった。自分にはかまわず片すみの衣桁いこうに掛かっている着物の袂たもとをさぐって何か帯の間へはさんでいたが、不意に自分のほうをふり向いて「あちらへいら

「っしやいね、坊ちゃん」と言った。そして自分のそばへ膝ひざのふれるほどにすわって「オオいやだ、お化け」と絵をのぞく。髪の毛がにおう。二人でだまって無心にこの絵を見ていたらだれかが「清香きよかさん」とあっちのほうで呼ぶ。芸者はだまって立って部屋へやを出て行った。

俊ちゃんと二人で奥の間で寝てしまったころも、座敷のほうはまだ宵よいのさまであった。

あくる日も朝から雨であった。昨夜の騒ぎにひきかえて静かすぎるほど静かであった。男は表の座敷、女どうしは奥の間へ集まって、しめやかに話している。母上

はねえさんと押し入れから子供の着物など引きちらして何か相談している。新聞を広げた上に居眠りを始めている人もある。酒のにおいのこもった重くるしいうっとうしい空気が家の中に満ちて、だれもかれも、とんと気抜きのしたようなふうである。台所ではおりおりトン、コトンと魚の骨でも打つらしい単調な響きが静かな家じゅうにひびいて、それがまた一種の眠けをさそう。中二階のほうで、つまびきの三弦の音がして「夜の雨もしや来るかと」とつやのある低い声でうたう。それもじきやんで五月雨さみだれの軒の玉水が亜鉛のとゆにむせんでいる。骨を

打つ音は思い出したように台所にひびく。

昼から俊ちゃんなどと、じき隣の<sup>しんたく</sup>新宅へ遊びに行つた。

内の人は皆ねえさんのほうへ手伝いに行つていたので、

ただ中<sup>ちゆうき</sup>気で手足のきかぬ祖父<sup>おじい</sup>さんと雇いばあさんがいる

ばかり、いつもはにぎやかな家もひっそりして、床の間

の金太郎や鐘<sup>しやうき</sup>馘もさびしげに見えた。十六むさし、将棋

の駒の当てつこなどしてみたが気が乗らぬ。縁側に出て

見ると小庭を囲う低い<sup>どべい</sup>土塀を越して一面の青田が見え

る。雨は煙のようで、遠くもない<sup>はちまん</sup>八幡の森や衣笠<sup>きぬがさ</sup>山もぼ

んやりにじんだ墨絵の中に、薄く<sup>もえぎ</sup>萌黄をぼかした稲田に



は、草取る人のみのかさ簞笠が黄色い点を打っている。ゆるい調子の、眠そうな草取り歌が聞こえる。歌の言葉は聞き取れぬが、単調な悲しげな節で消え入るように長く引いて、一ふしが終わると、しばらく黙ってまたゆるやかに歌い出す、これを聞いているとなんだか胸をおさえられるようにで急にねえさんの宅うちへ帰りたくなつたから一人で帰つた。帰って見るともうそろそろ客が来始めて、例のうるさいお辞儀が始まっている。さつきから頭が重いようであつたから、ひとりで蔵の間へは行って八犬伝を見たが、

すぐいやになる。鯉こいでも見ようと思つて池の間へ行つて見た。縁側の柱へ頭をもたせてぼんやり立つ。水かさのました稲田から流れ込んだ浮き草が、ゆるやかに回りながら、水の面へ雨のしずくがかいては消し、かいては消す小さい紋といっしよに流れて行く。鯉は片すみの岩組みの陰に仲よく集まったまま静かに鰭ひれを動かしている。竜舌蘭りゆうぜつらんの厚いとげのある葉がぬれ色に光つて立っている。中二階の池に臨んだ丸窓には、昨夜の清香のさびしい顔が見える。窓の縁に頬杖ほおづえをついたまま、何やら物思わしそうに薄墨色の空のかなたを見つめている。こめか

みに貼はった頭痛膏づつうこうにかかるとおくれ毛をなでつけながら、自分のほうを向いたが、軽くうなずいて片頬かたほおで笑った。

夕方母上は、あんまり内をあけてはというので、姉上の止めるのにかかわらず帰る事になった。「お前も帰りましようね」と聞かれた時、帰るのがなんだかなごり惜しいような気もして「ウン」と鼻の中で曖あいまい昧な返事をする。ねえさんが「この子はいいでしよう。ねえ、お前も一晩泊まっておいで」とすすめる。これにも「ウン」と鼻で返事する。「泊まるのはいいがねえさんに世話をかけでないよ」と言っていよいよ一人で帰るしたくを

せられる。立て場まで迎えにやった車が来たのでねえさんと門まで送って出た。車が柳の番所の辻つじを曲がって見えなくなつた時急に心細くなつて、いつしよに帰ればよかつたと思う。「さあおいで」とねえさんは引つ立てるように内へはいる。

頭のぐあいがいよいよ悪くなつて心細い。母上といつしよに帰ればよかつたと心で繰り返す。けむる霧雨の田んぼ道をゆられて行く幌車ほろぐるまの後ろ影を追うような気がして、なつかしいわが家の門の柳が胸にゆらぐ。騒々しい、殺風景な酒宴になんの心残りがあつて帰りそこなつ

たのか。帰りたいたい、今からでも帰りたいたいと便所の口の縁へ立ったまま南天なんてんの枝にかかっている紙のてるてる坊さんに祈るように思う。雨の日の黄昏たそがれは知らぬまに忍び足で軒に迫ってはや灯ひともしごろのわびしい時刻になる。家の内はだんだんにぎやかになる。はしやいだ笑声などが頭に響いてわびしさを増すばかりである。

姉上に、少し心持が悪いからと、言いにくかったのをやっと言って早く床を取ってもらって寝た。萌黄もえぎ地に肉色で大きく鶴つるの丸まるを染め抜いた更紗さらさ蒲団ぶとんが今も心に残っている。頭がさえて眠られそうもない。天井につるし

た金銀色の蠅はえよ除け玉に写った小さい自分の寝姿を見てい  
ると、妙に気が遠くなるようで、からだがだんだん落ち  
て行くようななんとも知れず心細い気がする。母上はも  
ううちへ帰りついて奥の仏壇の前で何かしていられるか  
と思うとわけもなく悲しくなる。ねえさんのうちがにぎ  
やかなのに比べてわが家のさびしさが身にしむ。いろん  
な事を考えて夜着の領えりをかんでいると、涙が目じりから  
こめかみを伝うて枕まくらにしみ入る。座敷では「夜の雨」  
をうたうのが聞こえる。池の竜舌蘭りゆうぜつらんが目めに浮かぶと、  
清香の顔が見えて片頬かたほおで笑う。

この夜すさまじい雷が鳴って雨雲をけ散らした。朝はすっかり晴れて強い日光が青葉を射ていた。早起きして顔を洗った自分の頭もせいせいして、勇ましい心は公園の球<sup>たま</sup>投げ、樋<sup>ひ</sup>川<sup>かわ</sup>の夜ぶりと駆けめぐった。

義<sup>よし</sup>ちゃんは立派に大きくなっただが、竜<sup>りゅう</sup>舌<sup>ぜつ</sup>蘭<sup>らん</sup>は今はない。

雷はやんだ。あすは天気らしい。

(明治三十八年六月、ホトトギス)





日本文学電子図書館

---

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著 者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行

---



日本文学電子図書館